横浜市が木製ストロー採用

地産地消モデル第1号

アキュラホーム

横浜市が12月から木製ストローを採用する。アキュラホーム（東京都、宮沢俊哉社長）が開発し普及を進めるもので、市内のホテルや飲食店などでの利用促進を図る。横浜市が保有する水源林（山梨県道志村）の間伐杉を用い、市内の特例子会社などで障害者が製造する地産地消モデルの第1号だ。まずは同市で月間1万本の利用を目指していく。

林文子横浜市長は実物を手に取り「この木製ストローは軽くて持ちやすく、まるで工芸品のように美しい。使い捨てはもったいないほど」と語った。横浜市の取り組みは、地域の材料と人で製造し、持続的な雇用と森林経営を全国に広げようとする地産地消モデル。

木製ストローを手に取って語る林市長

木製ストローは2018年12月にアキュラホームが発表し、19年1月からはザ・キャピタルホテル東急で採用が始まった。現時点では機械製造化が難しく、人の手で作るため、販価は50円（本）と高い。約0・5円のプラスチックストローとの価格差は大きく、普及の壁になっている。将来的には機械化でコスト低減を図るとともに、消費者の認知度向上にも力を入れている。

横浜市は「SDGs未来都市・横浜」を掲げ、市民や企業、大学などと連携して取り組んでいる。そのなかで木製ストローの意義をくみ取り、3月ごろから、取り扱いに向けて話し合いを進めてきた。

横浜市で製造するストローは、同市保有の水源林である道志村の間伐材だ。横浜市で使う材は神奈川県産材が最適かと思われたが、「道志の山は我々横浜の水源であり、そのために保有している。非常に身近な存在だ」（横浜市）とする。市内企業の特例子会社では、6人が製造技術を学んでいる。

木製ストローの利用には成田空港も関心を寄せている。現時点で木製ストローを採用するホテルは、利用した人に対して50円で販売。横浜市内のホテルでもこの手法で採用する。

現在アキュラホームでは、「使い捨てではもったいない」という声が多いことから、繰り返し使える製品の開発を進めている。

広島で2棟目の大型パネル

建て方見学会を実施

アドグリーン

外構を含めた住宅建築を年間20～30棟前後手掛けるアドグリーン（広島市、津江知典社長）は10月30日に広島市内で、ウッドステーション（千葉市）が普及を進めている大型パネルを初採用した新築在来2階建て住宅（約30坪）の建て方見学会を開いた。工務店やプレカットなど業界関係者約50人が参加した。

設計を担当したスタジオエンネ（広島県東広島市、松下陽子社長）が共催した。

大型パネルを生産する岡山工場から専用トラック4台で、窓と耐力壁、付加断熱部分まで事前に工場で生産された大型パネルを現場に納品した。アドグリーンの大工7人が、午前8時から1階のパネ

ホームコネクター賞とLVL賞

松尾建設・早瀬庵が受賞

ティンバライズ「T―1グランプリ」

NPO法人チーム・ティンバライズ（腰原幹雄理事長）は9日、東京大学弥生講堂で2018年度「T―1ホームコネクター賞」と「T―1LVL賞」を発表した。

ティンバライズでは11年から、都市木造の未来とその可能性を見せる建築物を選定する「T―1グランプリ」を開いている。15年からは、2つの特別賞としてT―1ホームコネクター賞とT―1LVL賞を創設し、先進的な木造建築物を表彰してきた。

18年度のホームコネクター賞は佐賀市の松尾建設本店ビル会議室棟、LVL賞は広島県廿日市市のやまだ屋おおのファクトリー早瀬庵お茶室が受賞した。

本店ビル会議室棟は、設計が松尾建設一級建築士事務所、構造設計がインフォメディア一級建築士事務所、施工が松尾建設。建物敷地面積は事務所棟と会議室棟を合わせて約7997平方㍍で、事務所棟は鉄骨造5階建て（2～5階床はCLT造）、会議室棟は準耐火仕様の木造2階建てだ。

LVL賞を受賞したお茶室を説明する山代氏

会議室棟は木造ラーメン接合部をGIR工法で実現しており、接合部はスクリムテックジャパン（福岡県筑紫野市）のホームコネクターを採用した。ホームコネクターは中空式のボルト（接合金物）で木部と金物を接着剤とともに強靭に接合する手法で、今回は複雑な屋根架構やシームレスな意匠で役立ったという。

構造設計を担当したインフォメディアによると、「何千本のホームコネクターが干渉しないか3次元画像を作成してチェックしていった」と振り返った。なお、材料面では11㍍強の大スパンを飛ばすため、ハイブリッドビーム（米松＋杉）と構造用LVL（カラ松）で構成した。

一方、LVL賞の茶室は、建築設計が山代悟＋ビルディングランドスケープ、構造設計が佐藤孝浩／桜設計集団、施工が五洋建設。

山代氏は15年度に「みやむら動物病院」（東京都）でLVL賞を受賞しており、今回が2回目となった。

茶室は床面積が100平方㍍強の木造平屋。バイパス道路に面し、近隣に住宅地やコンビニ、隣接して工場があるやや騒がしい環境のなかで、静寂を求める茶室を設けるために苦労したという。茶室につながる通路でLVL積層面が仕上げになる壁柱を設け、日常から異空間に入り込む演出を行っている。

また、建物内は大きく2室で構成し、梁なしで最大10・6㍍のスパンを確保した。天井部分にあえて鉄骨の格子張りを採用して厚さ90㍉の薄いCLT（桧＋杉）を合わせたほか、壁には150㍉厚の輸入LVL（ラジアタ松）を用いた。

茶室内には広島名物のもみじ饅頭の手焼き体験ができる部屋があり、内装制限に対応するために壁に準不燃仕様の内装用LVLを取り入れたという。

試験中の薬剤紹介

オーシカ

オーシカ（東京都、堀口和秀社長）九州営業所（福岡県久留米市、青木泰三所長）は12日、久留米市で接着技術講習会を開いた。福岡県内外から商社や建材販売店、集成材メーカー担当など約40人が出席した。

同社中央研究所の福田耕嗣氏は「都市の木質化に向けた動向と取り組み」と題して、日本の森林の現状や木材の利用方法を説明し